

# 海外食料需給レポート

(2020年3月)

令和2年3月31日

農林水産省

# 海外食料需給レポートについて

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

## 5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

### (1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

### (2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

### (3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

# 目 次

## 概要編

I	2020年3月の主な動き	1
II	2020年3月の穀物等の国際価格の動向	2
III	2019/20年度の穀物需給（予測）のポイント	2
IV	2019/20年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報	
	ブラジル大豆、とうもろこしの生産・輸出動向と課題	3

### (資料)

1	穀物等の国際価格の動向	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	8
3	令和元年9月以降の食品小売価格の動向	9

## 品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	7
3	米	11
II	油糧種子	
	大豆	15

### 【利用上の注意】

## (概要編)

## I 2020年3月の主な動き

### 1 2020/21年度産小麦の生産動向

北半球では、2020/21年度産の冬小麦が休眠期を終え、生育が再開する時期を迎えている。IGC(国際穀物理事会)の2月レポートによれば、2020/21年度の小麦については、収穫面積が2019/20年度を上回り、生産量は、史上最高となった2019/20年度を上回る769.0百万トンの見通し。世界の小麦需給は、引き続き、高い在庫水準で推移するとみられる。

各国別では、ロシアでは、霜害が少なく生育状況は良好で、収穫面積が前年度より3%増加する見通し、EUでは、北部は降雨があったが南部で降雨不足となり、収穫面積は前年度より減少の見通し。

一方、米国では、北部の冬小麦は順調に生育しており、4月以降作付けされる春小麦を含めた収穫面積は2%増加の見通し。

また、インドでは、政府支持価格が高く、降雨に恵まれたため、前年度より作付面積が13%増と大幅に増加する見通し。

### 2 アルゼンチンの生産・輸出動向

アルゼンチンにおいては、前年12月に2段階にわたる輸出税の引き上げが決定。(大豆:約25%→30%→最大33%)、2度目の引上げについて3月に入り施行。なお、大豆については、生産規模ごとに税率が20~33%と細分化され、年間1000トンを超える生産者は33%課税されることとなった。

これに対し、生産者が反発し、3月9日から4日間の販売ストライキを行った。

3月に入り、アルゼンチンの主産地では生育期を迎えているが、乾燥天候となり、単収の低下が懸念されている。アルゼンチンは米国に次ぎ、世界第2位の穀物輸出国であることから、アルゼンチンの穀物生産・輸出動向に注視。

写真 アルゼンチン北部サンタフェ州の圃場  
成熟期を迎えている(2月24日撮影)



### 3 中国の穀物生産動向

中国農業農村部が2月25日付けで、今年の農産物の生産方針等について公表した。

主に食糧生産(穀物+芋類+豆類)は650百万トンを超え、豚肉の生産量は平年レベル近くまで回復見込み。

冬小麦の作付面積は22.1百万ヘクタールで、現在、土壌水分に恵まれ、生育状態は良好。

今年の春まき用の穀物の作付意向面積については、60.0百万ヘクタールで、前年と比較して、主に早期米の減少により、0.2百万ヘクタールのわずかな減少。

今年の作付面積の調整では、穀物の面積を減らすことはなく、とうもろこしの作付面積は変わらないとしている。

## II 2020年3月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2月下旬、200ドル/トン前後で推移。その後、3月中旬には、世界の潤沢な在庫状況と世界的に2020/21年度産冬小麦の生育状況が順調なこと等を背景に180ドル/トン前半まで下落した。しかしながら、3月下旬に入り、多くの国で主食となる小麦の世界的な需要の増加期待をうけ上昇に転じ、3月下旬現在、210ドル/トン前後で推移。

とうもろこしは、2月下旬、140ドル/トン台後半で推移。南米の豊作見通しや世界的な需要減少懸念等から、低下傾向で推移し、3月下旬現在、130ドル/トン半ばで推移。

米は、2月下旬、470ドル/トン台前後で推移。タイ北部での降雨不足による乾季米減産により、タイ産米の供給量が減少する見通しから、高い水準を維持しており、3月下旬現在、510ドル/トン半ばで推移。

大豆は、2月下旬、320ドル/トン台前半で推移。中国が米国産大豆の追加関税の引き下げや輸入業者向けの免税措置を公表したことから、3月上旬に330ドルまで上昇したが、3月中旬の米国農務省需給報告で南米の生産量が上方修正されたこと、ブラジルの収穫開始による米国産の輸出減退懸念からやや下落し、3月下旬現在、320ドル/トン半ばで推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

## III 2019/20年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から3.7百万トン上方修正され26.7億トン。消費量は、前月より0.2百万トン下方修正され26.7億トンとなり、生産量が消費量をわずかに下回る見込み。

また、期末在庫率は前月から上方修正され29.8%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前月と比較して、小麦と米、とうもろこしで上方修正。穀物全体では上方修正され26.7億トンの見込み。

消費量は、前月と比較して、小麦ととうもろこしで上方修正、米で上方修正。穀物全体では下方修正され26.7億トンの見込み。

貿易量は、小麦、とうもろこしで上方修正、米で下方修正され、4.3億トンの見込み。

期末在庫量は、8.0億トンと前月より上方修正され、期末在庫率も前月から上方修正された。

(注：数値は3月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

## IV 2019/20年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前月から上方修正され5.8億トン。消費量は前月から上方修正され5.9億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前月から上方修正され、19.9%となる見込み。

(注：数値は3月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

## V 今月の注目情報: ブラジル大豆、とうもろこしの生産・輸出動向と課題

ブラジルでは、近年、中国への輸出向け大豆生産量が大幅に増加し、これに伴い、大豆収穫後の圃場で作付けされる冬とうもろこしの生産量も増加している。この結果、大豆、とうもろこしとも生産量は1億トンを超え、大豆は、コーヒーなどと同様に世界一の生産・輸出国となった。とうもろこしも、米国に次ぐ世界第2位の輸出国である。

同国の穀物等の生産・輸出の著しい増加は、世界需給に与える影響が大きいことから、2月に実施した現地調査の結果も含め、最近のブラジルの大豆、とうもろこしの生産・輸出動向と課題をまとめた。

### 1 近年のブラジルの大豆、とうもろこしの生産状況

#### (1) 大豆

ブラジルの大豆については前年9月から11月頃に作付けが行われ、2月以降、収穫期を迎えている。3月中旬現在、主産地の中西部のマトグロッソ州では収穫がほぼ終了、南部のパラナ州、リオグランデドスル州でも収穫最盛期を迎えている。作柄については、生育期を通じて降雨の少なかったリオグランデドスル州を除き、天候に恵まれ、概ね良好である。また、中国を初めとする世界の大豆需要の増加に伴い、ブラジルの作付面積が増加したことから、生産量も年々増加している。

USDA（米国農務省）によれば、2019/20年度のブラジル産大豆の生産量について、史上最高の126.0百万トンを見込んでいる。これは米国の2019/20年度の生産量（96.8百万トン）を30百万トン近く上回っており、世界第1位の生産国となる見通し。Conab（ブラジル食料供給公社）の月例報告（2020.3.10）でも124.2百万トンと前年度を8%上回る生産量の見通しとなっている。

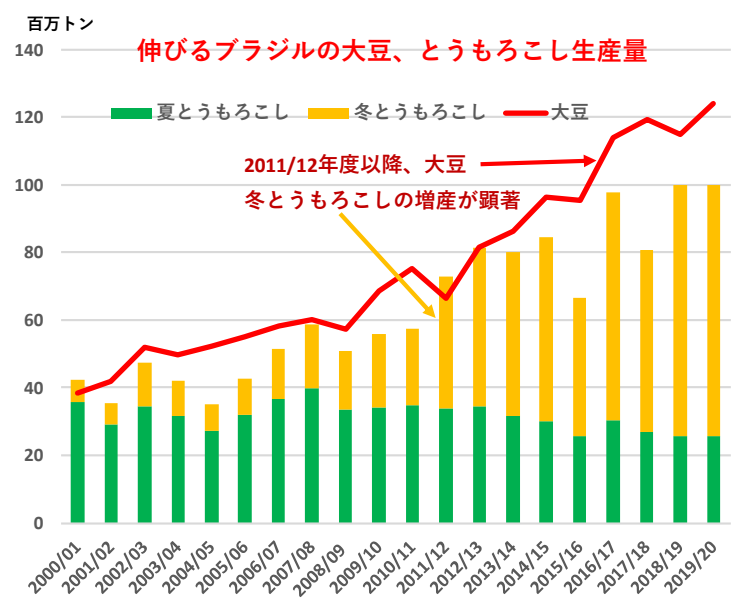
#### (2) とうもろこし

とうもろこしについては、10年前までは、大豆同様9月～11月に作付けが行われ、翌年3月頃から収穫が行われていた。これを「夏とうもろこし」と呼んでいる。これに対して、近年、温暖な中西部を中心に夏の時期の大豆の作付けの増加に伴い、大豆収穫後の圃場に2月～4月にかけて作付けられ、7月～9月に収穫されるとう

写真1 大豆収穫（2020.2.16）  
パラナ州ポンタグロッサ市郊外



図1 ブラジルの大豆、とうもろこしの生産量の推移



出典：Conab

もろこしが増加しており、これを「冬とうもろこし（サフリーニャコーン）」と呼んでいる。（品目別需給編P. 17 大豆—ブラジルのクロープカレンダー参照）

2011/12年度以降、冬とうもろこしの生産量が夏とうもろこしの生産量を上回り、現在、冬とうもろこしがとうもろこし生産全体の約7割のシェアを占めている。USDAによれば、夏・冬作合計の生産量が年々増加しており、2018/19年度には100百万トンを突破し、2019/20年度も2年連続で100百万トンを上回る見通しである。生産量では米国、中国について世界第3位となっている。現在、2019/20年度の夏とうもろこしが収穫期を迎え、作柄は大豆同様に良好となっており、冬とうもろこしの作付けも天候に恵まれ、概ね順調に進展している。

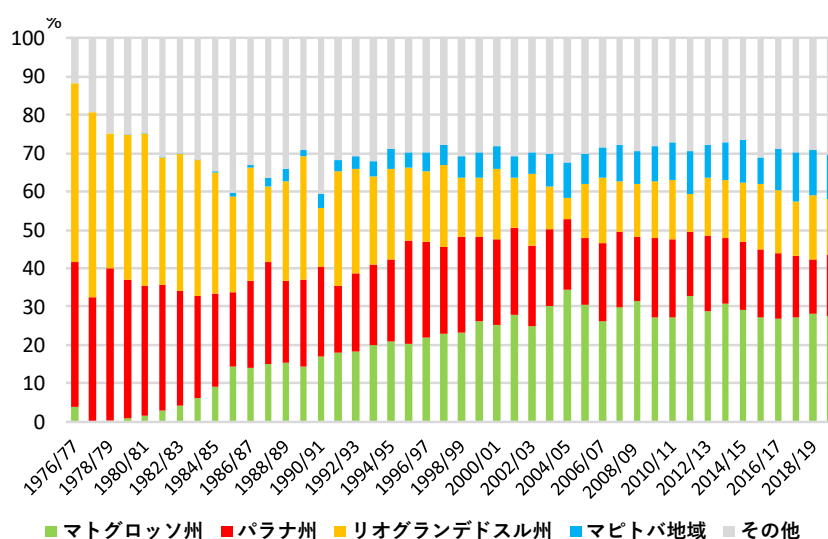
### （3）増産の要因

大豆、とうもろこしの生産量の推移を見ると、特に、2011/12年度以降、最近10年間の生産量の伸びが目立っている。2010年以降、中国の大豆の輸入量が増加したことに伴う大豆の作付面積の拡大が主な要因と言われている。作付面積の増加に伴い、産地は従来からの中心地域である南部・南東部から北部・北東部に拡大している。セラード地域に位置するマトグロッソ州での大豆生産は、1980年代に入って本格化し、マトグロッソ州は現在、大豆・とうもろこしの最大生産州となっているが、同州の北部・北東部で耕地が引き続き拡大している。また、同じくセラード地域で北東に位置するマラニョン州、ピアウイ州、トカンチンス州、バイーア州の4州が、今後大規模開発のポテンシャルが高いとして注目されている地域であり、州の頭文字をとって「マピトバ地域」と呼ばれている。

2月にサンパウロ市及び南部のパラナ州で行った現地調査における輸出商社や農協等の見方は以下のとおりである。ブラジルの耕作地の拡大余地について、アマゾンやセラード地域において森林を伐採しなくても、牧畜業の単位面積当たり飼養頭数を向上させるだけで現在のブラジルの穀物等の作付面積に匹敵する50～80百万ヘクタールの広大な放牧地を農地に転換することが可能であるとのことである。また、マピトバ地域については、雨季が短いため、

裏作ができず、気象面でのリスクが高いが、今後の開発余地は十分にある。ブラジルの単収の向上についても、大豆の単収はすでに米国と遜色ないレベルであり、劇的な伸びは見込めない。しかし、とうもろこしは、特に生産シェアの大きい冬とうもろこしの単収が土壌管理不足のため依然として低く、大豆に比べ単収向上の余地が十分にある。結果として、ブラジルは今後も増大する世界の食料需要を持続可能な形で賄うことができる唯一の国ではないかといった意見が聞かれた。

図2 ブラジルの大豆の主要生産州の生産シェアの推移



出典：Conab



## 2 ブラジルの輸出インフラの改善

### (1) 輸出競争力の劣るブラジルのインフラ

ブラジルの大豆、とうもろこしの生産量は大幅に増加したが、輸出拡大に当たり、課題となっていたのが輸送インフラである。

現地の輸出商社によれば、大豆やとうもろこしの北部・北東部・中西部地域における生産は全体の約6割で、南部・南東部が約4割を占めるのに対して、北部・北東部の港湾から輸出される農産物は約3割で、南部の港からの輸出が約7割となっている。このことから、主要産地のマトグロッソ州中部からサントス港やパラナグア港など南部の輸出港への輸送は主に長距離トラック輸送に依存することとなり、輸送コストが高い。

ミシシッピ川のバージ(はしけ)運送を活用した大量の穀物輸出が可能な米国と、内陸部からの長距離トラック輸送に依存してきたブラジルを比較

すると、輸送コストはブラジルの方が高くなる。また、2018年のトラック運転手の大規模ストライキに代表されるようなトラック運転手や港湾でのストライキも発生し、ブラジルの輸出競争力が劣っているとされる要因となっていた。

写真2 穀物トラック、鉄道の様子(2020.2.19)  
パラナ州パラナグア港



### (2) インフラの改善

ブラジル政府においても、輸送インフラの整備不足がブラジル農産物の輸出のネックとなっていることを認識し、インフラ整備に力を入れており、2019年末には、マトグロッソ州中部とアマゾン川沿いのパラ州までの国道163号線の全面舗装が完了した。これに伴い、今まで、マトグロッソ州から南部のサントス港やパラナグア港までトラック運送されていた穀物等が、アマゾンの舟運等を活用して北部のサンタレン港、バルカレナ港などから輸出をすることも可能となった。また、サンパウロ州と北東部のトカンチンス州とを結ぶ南北鉄道の南部区間(約1500km)も早ければ2021年頃に運行を開始する予定である。国道163号線と並走する穀物鉄道のコンセッションの入札も2020年後半に実施される予定であり、近い将来に輸送インフラが劇的に改善される可能性がある。(P.6参考資料の図を参照)

現地の農協や輸出商社によれば、北部の港を活用することにより農産物の輸送コストが今後3割程度削減できる。国道163号線の全面舗装に加え、今後、鉄道も整備されることで、従来パラナグア港から輸出されていた農産物の約半分が北部・北東部の港から輸出されるだろうといった意見が聞かれた。

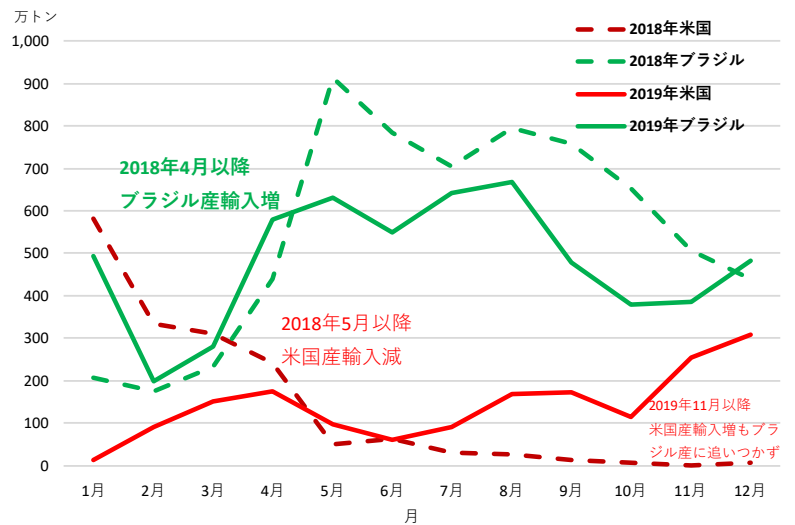
## 3 ブラジル産大豆、とうもろこし輸出の今後の課題

### (1) 大豆、とうもろこし輸出

ブラジルの大豆の生産増を支えてきたのは、旺盛な中国の畜産需要の伸びに伴う、中国の大量の大豆輸入であった。中国の所得水準の向上に伴う大豆輸入の増加により、ブラジルの大豆輸出は大幅に伸びた。中国での2018年のASF発生後も、米中通商摩擦による2018年7月からの中国による米国産大豆を初めとする米国産品への追加課税による大豆輸入のブラジル産への切り替え

から、ブラジルの中国向け大豆輸出は高水準で推移してきた。とうもろこしについても、東南アジアの所得水準の向上による食の西洋化・多様化に伴う肉類の消費増から、ベトナムを始めとする東南アジア諸国向けの輸出が増加してきた。2019/20年度は、ライバルの米国で降雨過多による作付面積の減少等から大豆、とうもろこしの生産量は減少した。さらに、アルゼンチンでフェルナンデス新政権が前年から本年にかけて大豆の輸出税を2段階にわたり引き上げた。この結果、ブラジルにとっては通貨レアル安も相まって最高の輸出環境が整っているとみられる。

図3 中国の米国産とブラジル産の大豆の輸入の推移



出典：中国海関統計

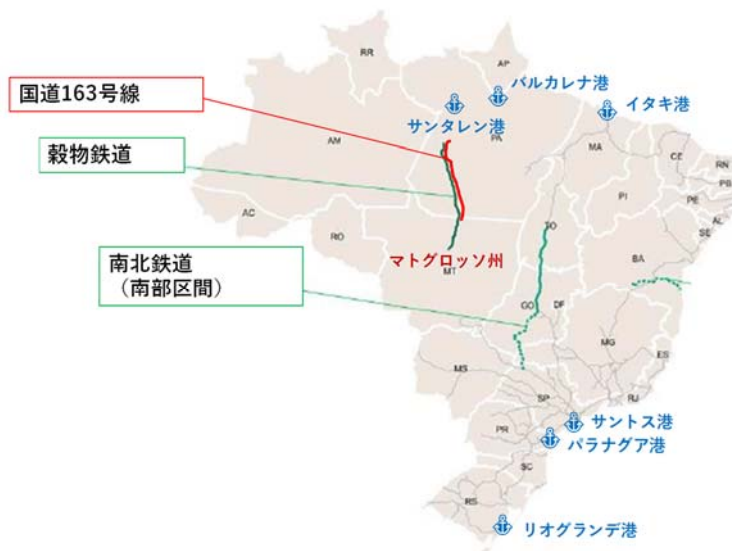
(2) 今後の注目すべき事項

中国では、ASF の発生に伴い、2019 年は豚肉の生産量が 2 割以上減少し、大豆やとうもろこしの飼料向け需要が伸び悩み、代替の肉類の輸入が大幅に増加した。これに伴い、2019 年のブラジルの肉類の輸出も大幅に伸びた。

USDAによれば、ブラジルにおいて、大豆の豊作見通しから 2019/20 年度の大豆輸出量は前年度と比較して増加するとともに、国内需要も増加する見通しである。

ただし、ブラジルがとうもろこし、大豆といった穀物・油糧種子を輸出するのか、それとも国内で畜産向けに消費し、肉類として付加価値をつけて輸出するのかは中国の需要動向に左右される。いずれにせよ、内陸部からの輸送インフラ整備の進捗がブラジル農・畜産物の輸出競争力の向上に大きく貢献するとみられる。

参考資料 南北鉄道（南部区間）、穀物鉄道、国道 163 号線の位置図

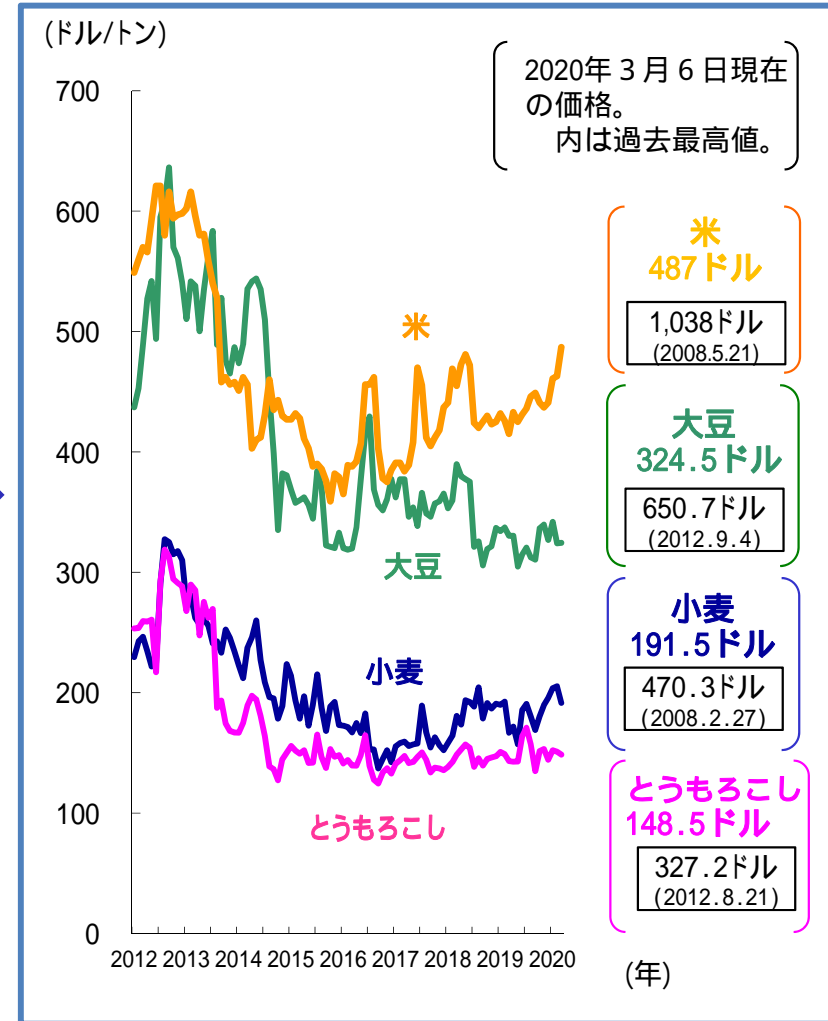
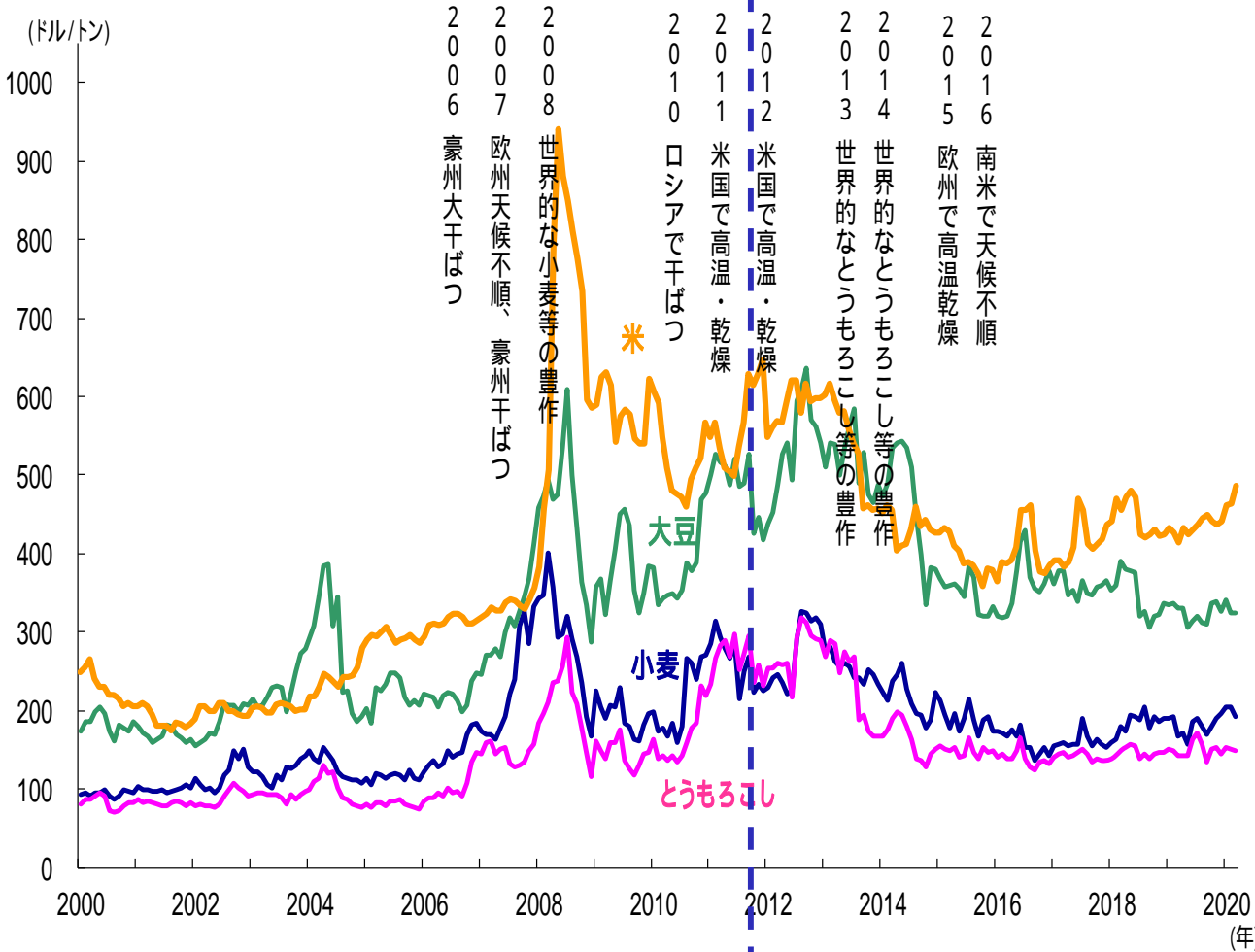


出典：ブラジル物流企画公社（EPL）資料を基に農林水産省にて加工

# 資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこし、大豆の豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移。米は、2013年以降、タイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

## 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

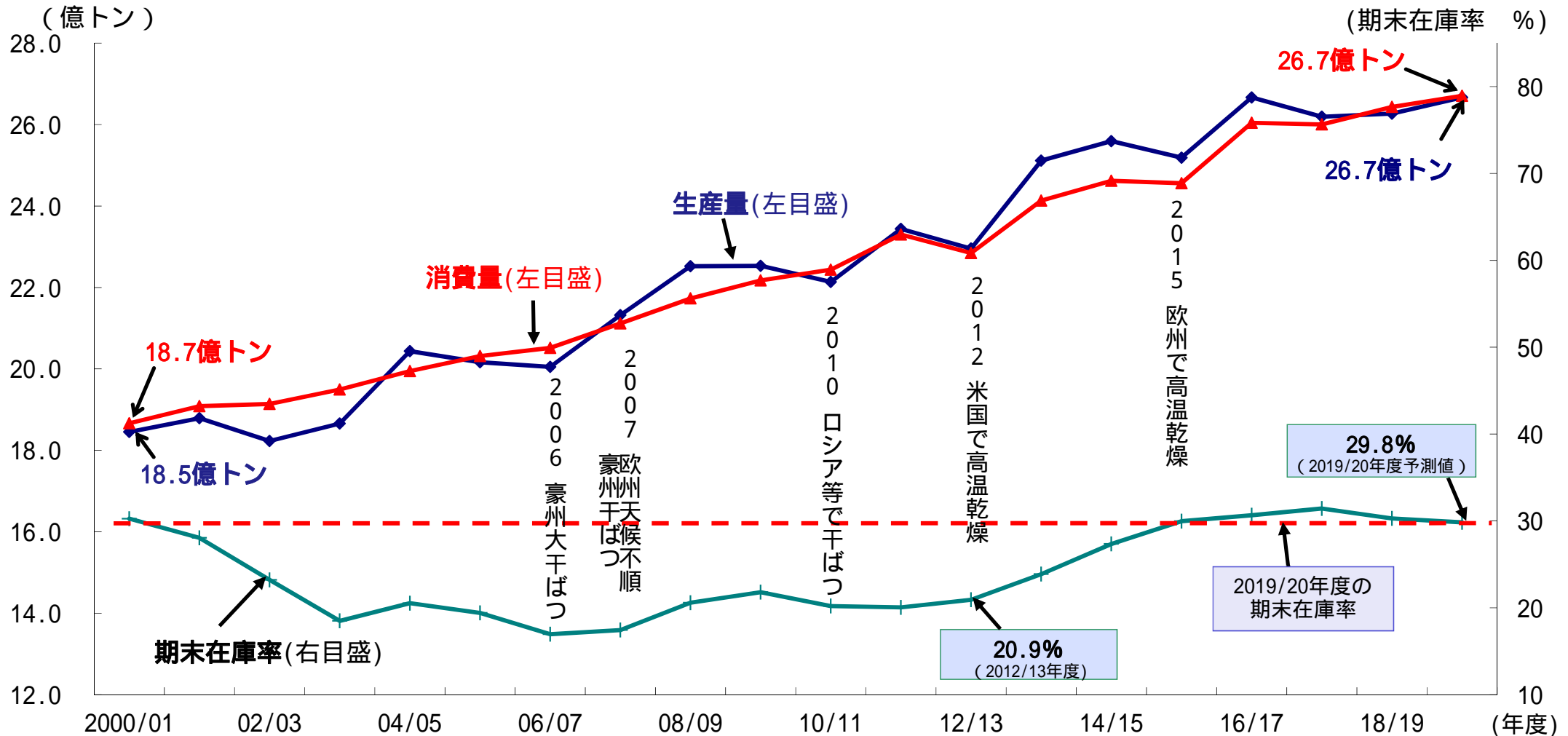
注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2019/20年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。

2019/20年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、29.8%となるものの、直近の価格高騰年の2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。

### 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(March 2020)、「PS&D」  
 (注)なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

# 資料3 令和元年9月以降の食品小売価格の動向

加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

## 令和元年9月～令和2年2月の食品小売価格の動向

## 【参考】令和元年10月～令和2年3月の食品小売価格の動向

品目	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R元				R2		上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	
生鮮食品を除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.7	101.6	102.0	102.2	102.2	102.0	101.9	0.6%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.3	102.4	102.4	102.0	102.0	102.2	101.8	-0.6%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	102.4	106.0	105.8	105.4	103.8	103.6	104.9	5.9%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	101.0	101.4	101.5	101.2	101.0	101.0	101.5	0.9%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	92.8	92.9	92.9	93.0	92.3	91.8	91.9	-1.5%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	101.4	102.0	101.3	101.8	102.0	101.9	101.7	1.4%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	102.9	103.9	102.3	104.3	102.7	101.3	102.3	-0.9%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.3	102.4	102.4	102.2	102.4	102.5	102.3	0.4%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.1	95.6	94.7	93.6	94.2	95.7	93.9	-1.7%

品目	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R元			R2			上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
食パン	97.7	100.0	100.9	99.5	99.8	103.2	103.0	103.4	103.0	103.2	102.3	101.6	-0.7%	-2.1%
即席めん	93.3	100.0	99.8	99.6	99.5	105.3	107.9	107.9	108.5	108.5	108.5	107.9	-0.6%	5.9%
豆腐	100.3	100.0	96.9	95.6	95.0	95.7	94.7	94.7	94.7	95.5	95.1	95.1	0.0%	-0.8%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	96.3	94.6	94.6	100.1	98.6	98.9	98.3	98.3	97.1	96.8	-0.3%	-3.4%
みそ	99.0	100.0	99.8	101.6	106.8	111.0	111.5	110.6	111.0	110.8	111.7	110.6	-1.0%	0.3%
チーズ	97.1	100.0	100.0	99.7	103.2	105.7	106.4	106.4	106.4	105.3	106.9	105.3	-1.5%	-1.5%
バター	94.6	100.0	101.3	102.0	102.3	102.7	102.7	103.0	103.0	103.0	103.0	103.0	0.0%	0.5%
マヨネーズ	101.6	100.0	99.2	98.4	97.2	102.4	102.1	100.0	100.7	101.4	101.0	100.0	-1.0%	-2.3%

資料:総務省消費者物価指数

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2:調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。